

2013 年度 京都教育大学大学院 障害児教育専修 修士論文

現代の保育園幼児の発達の特徴について

—新版 K 式発達検査 2001 と新版 S・M 社会生活能力検査による検討—

京都教育大学大学院 障害児教育専修

115021 中市 悠

京都教育大学 発達障害学科

指導教員 郷間 英世

目次

I．問題と目的	2
II．方法	5
III．結果	8
IV．考察	28
文献	31
資料	33
謝辞	

I. 問題と目的

最近の子どもは以前の子どもの比べてさまざまな点で変わってきていることが指摘されている（郷間 2011）。また、子どもの発達や行動が変化していることが危惧され、保育者は一人で保育可能な子どもの数が減少したと訴えている（川越ら 2011）。

知的発達についての子どもの変化について、以下のような報告がある。

秋山ら（2006）は、現代っ子の特徴を明らかにするため、乳幼児健診で実施された津守・稲毛式乳幼児発達質問票の結果を使って 1961 年および 1989 年の結果と比較し、現代の健常児幼児の発達を評価した。その結果、運動領域の 20 分くらい歩ける（18 か月）、探索・操作領域のいろいろなものを紙布などに包んで遊ぶ（21 か月）、玩具の電話のダイヤルを回して「もしもし」という（21 か月）、社会領域の欲しいものがあっても言いきかせれば我慢して待つ（24 か月）、年下の子どもの世話をやきたがる（30 か月）、食事・排泄・生活習慣領域のコップからじょうずに飲む（7 か月）、食べ物以外は口に入れなくなる（18 か月）、おしっこした後でしらせる（18 か月）、物を片付けるのを手伝う（21 か月）、理解・言語領域で父や母のことを問うとそちらを見る（10 か月）、簡単な質問に答える（21 か月）などの多くの質問紙項目で通過する割合が減少し、「自他の区別と自己主張の低下」「積極的な言語活動の低下」「我慢すること、忍耐力の低下」「手先の器用さの低下」「興味や関心、注意力の低下」などがあると報告した。川越ら（2011）は、グッドイナフ人物が知能検査を用いて現代の子どもの描画発達について報告している。その結果、対象児の平均描画発達年齢は 63.4 か月で生活年齢 69.8 か月に比べ約半年の遅れを認めた。対象児全体の DAM-IQ は 91.3 ± 12.9 （平均±標準偏差）であり、男女別にみると男児の DAM-IQ は 86.9 ± 10.7 、女児の DAM-IQ は 95.4 ± 13.3 であり、男児より女児方が有意に高いことが明らかになった。同時に実施した三角形模写課題に通過したのは男児が 43.8%、女児が 71.7% であり女児が有意に多かったとしている。三角形模写を通過した群と通過しなかった群に分けた平均 IQ は三角形通過群の DAM-IQ は 95.6 ± 13.5 であるのに対し、三角形模写不通過群の DAM-IQ は 85.3 ± 9.1 であり、三角形模写通過群が有意に高かった。最近の子どもの人物画は以前の子どもの比べ、頭が大きい、眉や鼻の描写が少ないなどの特徴を有し、描画発達年

齢は 1977 年の標準化データに比べ約 6 か月遅延し、この遅れは女児より男児で大きいことが明らかになったとしている。また、郷間ら（2006）によると、1980 年公刊の新版 K 式発達検査と 2002 年公刊の新版 K 式発達検査 2001 の標準化資料を用い、現代の子どもの発達特徴を検討した結果、発達の促進している項目が乳児期で 62.8%と多かったが、幼児期前半 39.2%、幼児期後半 10.3%と減少し学齢期は 30%とやや増加した。発達の遅延した項目は乳児期の 33.7%から幼児期前半 51.0%、幼児期後半 89.7%と増加し、学齢期では 70%とわずかに減少した。領域別にみると姿勢・運動領域では、乳児期は発達が促進している項目が 90%以上であるが、幼児期になると減少する。認知・適応領域では、乳児期と幼児期前半では発達の促進している項目と遅延している項目が同じような割合であるが、幼児期後半になると発達の促進している項目がなくなり、すべて遅延している項目となった。しかし学齢期には促進している項目もわずかに出てくる。言語・社会領域では、乳児期では促進している項目が遅延している項目に対してわずかに多いが、幼児期前半にはすべて遅延している項目になる。そして、幼児期後半から発達の促進している項目が再び見られるようになり、この傾向は学齢期も持続する。発達が遅れてきている項目が多く、その発達の遅れは幼児期前半から始まり、幼児期後半から顕著になっていることやその遅れは特に三角形模写や菱形模写描画発達で大きな変化を認め、特に菱形模写では 1983 年に比べ 2001 年では 12 か月遅れてきていることを明らかにした。一方、数は少ないものの促進してきた発達課題が併存し、しかもその変化は子ども全体に及んでいることから、子ども全体の発達がアンバランスになってきている（郷間 2011）とも考えられる。

一方で、日常生活場面や保育場面での子どもの変化についても報告されている。

従来に比べて子どもの育ちが何かおかしいのではないか、子どもを取り巻く環境が悪化しているのではないかなど、子どもの成長に関する懸念が多く聞かれるようになっており、近年の幼児の育ちについては、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている（中央教育審議会 2005）。池田ら（2007）は、2003 年から 2005 年にかけて保育所勤務 5 年以上の保育士に質問紙調査を実施した。その結果、ことば・コミュニケーション、行動、社会性・対人関係に関することに問題がある子どもについて悩みがあると回答したもの

が 68.5%であった。保育上の問題としては、診断を受けていないので関わりが難しい、加配がなく対応しきれない、どこまで個性を受け止めてどこから障害とするのかわからないなどがあげられた。話を聞けない、多動、集団生活に入れない、気持ちがコントロールできない、生活習慣が身につかないなどの問題がある子どもが保育所において以前と比べ増えたと回答した保育者は過半数を超え、その回答は年々増加したと報告している。また、保育者の経験年数が長いほど以前と比べて増えたと回答した保育者が多く、経験年数 25 年以上の保育者では、多動な子ども、きれいやすい子どもが以前と比べて増えたと回答したものの割合が 5～14 年の保育者に比べ優位に高かったとしている。本郷ら（2003）は、近年「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」「自分の感情をうまくコントロールできない」などの特徴を持つ子どもに対する保育をどのように進めていけばよいかということが大きな問題になってきていると報告している。それらの子どもたちは何らかの障害があるとは認定されていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられており、「気になる子」とされている。障害児と認定されている幼児を除いた「気になる子」の特徴を保育所の保育者に質問紙調査を行った結果、「気になる子」の特徴としては、周りの子どもにつられて騒いでしまう、他のことが気になって保育者の話を最後まで聞けない、集団場面より一対一場面の方が落ち着いていられるなどの項目の評価平均点が高かった。また、質問項目について因子分析を行った結果、他児の行動に対して怒る、ちょっとしたことでも意地悪をされたと思ってしまうなどの項目からなる対人トラブル領域、きょろきょろする、他のことが気になって保育者の話が聞けないなどの項目からなる落ち着きのなさ領域、集団場面より一対一の場面の方が落ち着く、好きなことには集中するなどの項目からなる状況への順応性の低さ領域、順番を守らないで横から入り込もうとする、遊びのルールを破って自分勝手に振る舞うなどの項目からなるルール違反領域の 4 因子が明らかになったとしている。

このように知的発達や社会性・日常生活場面での子どもたちの変化が報告されているが、知的発達と社会性・日常生活場面での様子の関連は明らかでない。

そこで本研究では、現代の保育園幼児の知的発達を把握するため新版 K 式発達検査 2001 を実施し、社会生活能力面での子どもの特徴を把握するため新版 S-M 社会生活能力検査を実施し、それらの関連や男女差について検討したので報告する。

Ⅱ．方法

1. 対象

対象は、K 市内 A 保育園に在籍する 2 歳児クラス 22 人（男児 9 人，女児 13 人），3 歳児クラス 24 人（男児 14 人，女児 10 人），4 歳児クラス 23 人（男児 13 人，女児 10 人），5 歳児クラス 24 人（男児 16 人，女児 8 人），計 93 人（男児 52 人，女児 41 人）の幼児である（Table 1）。

Table 1 対象人数

	男	女	全体
2 歳児	9	13	22
3 歳児	14	10	24
4 歳児	13	10	23
5 歳児	16	8	24
全クラス	52	41	93

2. 調査方法

調査期間は，平成 23 年 5 月から平成 24 年 4 月である。

知的発達を把握するため新版 K 式発達検査 2001 を実施し，社会生活能力面での子どもの特徴を把握するため新版 S-M 社会生活能力検査を実施した。また，保育場面での問題行動や行動特徴を知るため，行動観察を実施した。

新版 K 式発達検査 2001 の実施は，A 保育園内の一室で行った。実施時間は，一人 30 分から 50 分程度であった。検査者は，臨床心理士，臨床発達心理士，言語聴覚士であった。新版 S-M 社会生活能力検査は，担任保育士が記入した。行動観察は筆者が行い，担任保育士からも日常生活の様子を聴取した。

<新版K式発達検査>

「K式発達検査」は、1951年に嶋津、生澤らによって原案が作成され、その後3回の小修正を加えつつ使用されていた。その後、1980年には、3か月児から10歳までの尺度を備えた検査の標準作業が完了し、「新版 K 式発達検査」として公表された。引き続き、1983年尺度を14歳まで拡張した「増補版」が公表された。さらに、2001年、再改定版として「新版 K 式発達検査 2001」が公表された。かつては、スクリーニングを目的として用いられていたが、現在は、健常児・障害児を問わず、1人1人の子どもの発達状況や行動特性を理解し、望ましい行動の発達を援助するための手がかりを得るなど広義の臨床診断を目的とする方向に変化しつつある（生澤ら 2002）。

「新版 K 式発達検査 2001」は新生児から成人までを検査対象と考え標準化されている。項目は姿勢・運動領域、認知・適応領域、言語・社会領域の3領域に分かれている。通過項目の数によって得点を算出し、発達年齢（DA）を求める。生活年齢との比により、発達指数（DQ）を求める。

<新版 S - M 社会生活能力検査>

新版 S・M 社会生活能力検査についてであるが、1935年、アメリカのドル博士により具体的生活での社会生活能力を測定する尺度 “Vineland Social Maturity Scale” が発表され、各国で翻訳された。日本でも、1959年、“Vineland Social Maturity Scale” の翻案を骨組みとした『S・M 社会生活能力検査』が刊行された。“Vineland Social Maturity Scale” と『S・M 社会生活能力検査』をもとに、今日の社会生活状況に合わせて新しく作成された検査が『新版 S・M 社会生活能力検査』である。新版 S・M 社会生活能力検査は、子どもの日常生活場面での行動が検査の対象となり、1才から13才までの子どもの社会生活能力の発達を測定することができる。被験者の特徴をよく理解している家族や担任教師などが質問紙に記入するものである。社会生活能力の構成領域として、身辺自立、移動、作業、意見交換、集団参加、自己統制の6領域がある。検査結果は、社会生活年齢（SA）と社会生活指数（SQ）に換算され、領域別のSAを出すことができる。また、領域別のプロフィールから、社会生活能力面での子どもの特徴を捉えることができる（三木 1980）。

3. 分析

新版 K 式発達検査 2001 は、認知・適応領域、言語・社会領域、全領域の発達指数 (DQ) を求めた。新版 S-M 社会生活能力検査は、社会生活指数 (SQ) を求め、6 つの構成領域は社会生活年齢 (SA) を年齢で割り、指数を算出し生活指数とした。

DQ や SQ の平均値を求め、男女別、構成領域別に比較した。

分析はすべて t 検定で行った。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮については、研究の目的・方法について文書により対象保護者に説明し、同意を得た。データ分析は、個人が特定できないように処理して行い、プライバシーの保護を行った。データは鍵のかかるところに保管した。なお、本研究は京都教育大学の倫理委員会の承認を受けたものである。

Ⅲ．結果

発達指数（DQ）が 69 以下の幼児は知的障害の可能性があるので、除外した。

93 人の内、新版 K 式発達検査を実施できなかったのは 3 歳女児 2 人、新版 K 式発達検査の発達指数が 69 以下だったのは 5 歳男児 1 人であり、計 3 人を除いた 90 人について分析を行った。（Table2）

Table 2 分析対象

	男	女	全体
2 歳児	9	13	22
3 歳児	14	8	22
4 歳児	12	10	22
5 歳児	16	8	24
全クラス	51	39	90

1．新版 K 式発達検査 2001

新版 K 式発達検査 2001 実施時の対象児の年齢（月齢）は 2 歳児クラスの男児は 36.0 ± 2.4 か月（平均値 $\pm$ 標準偏差）、女児は 37.3 ± 0.5 か月、全体では 36.8 ± 1.7 か月であった。3 歳児クラスの男児は 49.4 ± 0.6 か月、女児は 49.3 ± 1.0 か月、全体では 49.4 ± 0.8 か月であった。4 歳児クラスの男児で 60.8 ± 2.4 か月、女児は 61.3 ± 0.5 、全体では 61.0 ± 1.8 か月であった。5 歳児クラスの男児は 72.5 ± 1.9 か月、女児は 73.3 ± 1.0 か月、全体では 72.7 ± 1.7 であった。（Table3）

Table 3 新版 K 式発達検査 2001 実施時の対象児の年齢(月齢)(平均値±標準偏差)

	男	女	全体
2 歳児	36.0±2.4	37.3±0.5	36.8±1.7
3 歳児	49.4±0.6	49.3±1.0	49.4±0.8
4 歳児	60.8±2.4	61.3±0.5	61.0±1.8
5 歳児	72.5±1.9	73.3±1.0	72.7±1.7

新版 K 式発達検査 2001 の発達指数 (DQ) ごとの人数を Table4 に示した。新版 K 式発達検査の発達指数が 70～79 だったのは 8 人 (男児 5 人女児 3 人) で全体の 0.09%, 80～89 だったのは 23 人 (男児 12 人女児 11 人) で 25.6%, 90～99 だったのは 22 人 (男児 15 人女児 7 人) で 24.4%, 100～109 だったのは 27 人 (男児 13 人女児 14 人) で 30.0%, 110～119 だったのは 8 人 (男児 5 人女児 3 人) で 8.9%, 120～129 だったのは 1 人 (男児 1 人女児 0 人) で 1.1%, 130～139 だったのは 0 人で 0%, 140～149 だったのは 1 人 (男児 0 人女児 1 人) で 1.1%であった。(Fig1)

Table 4 年齢・性別ごとの発達指数

	2 歳		3 歳		4 歳		5 歳		全体
	男	女	男	女	男	女	男	女	
70～79	2	1	0	0	2	0	1	2	8
80～89	3	4	3	3	3	3	3	1	23
90～99	3	1	2	1	4	1	6	4	22
100～109	1	6	6	1	1	6	5	1	27
110～119	0	1	2	2	3	0	0	0	8
120～129	0	0	1	0	0	0	0	0	1
130～139	0	0	0	0	0	0	0	0	0
140～149	0	0	0	1	0	0	0	0	1

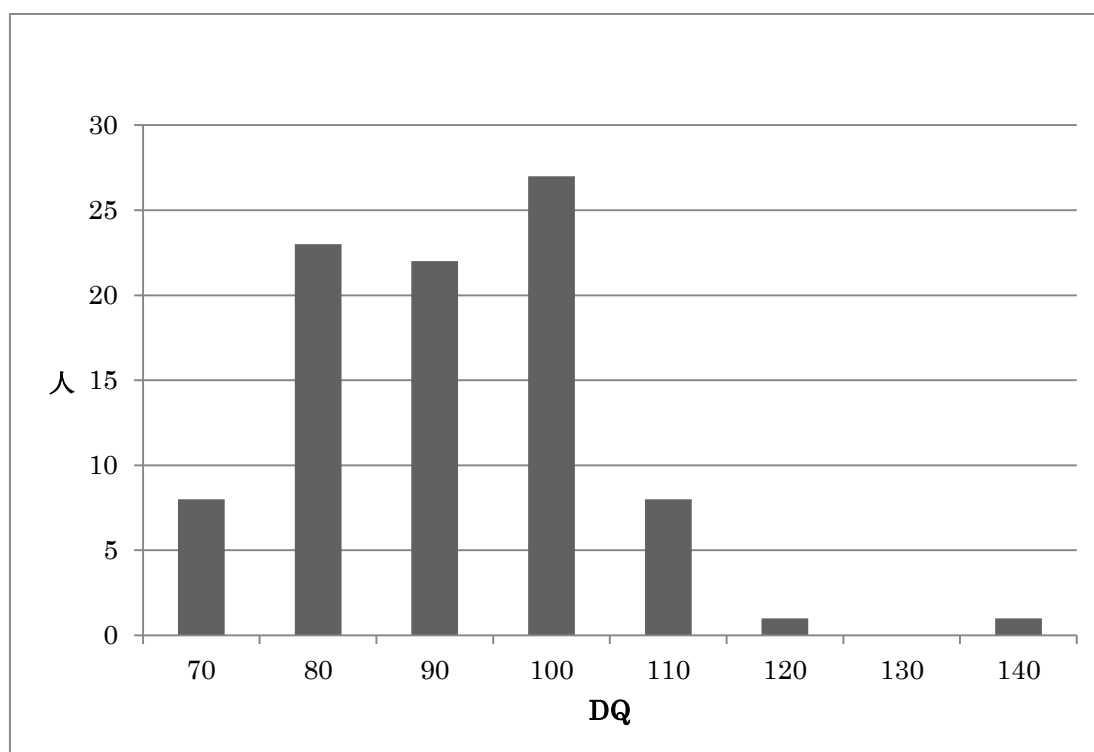


Figure 1 新版 K 式発達検査 発達指数の分布

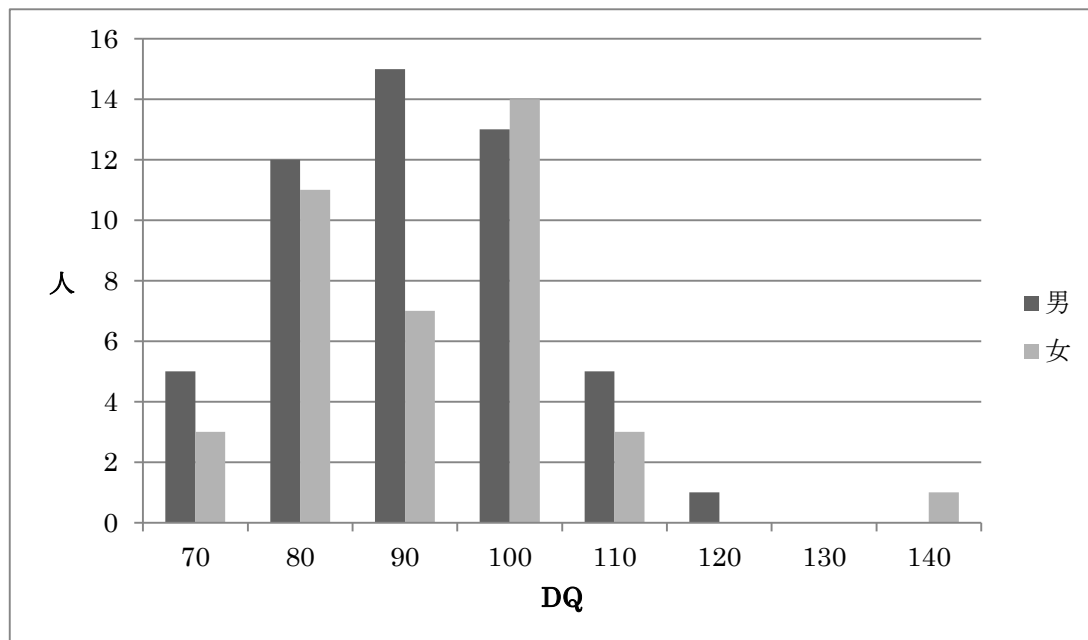


Figure 2 新版 K 式発達検査発達指数の男女別分布

新版 K 式発達検査 2001 の各領域の発達指数を Table5 に示した。

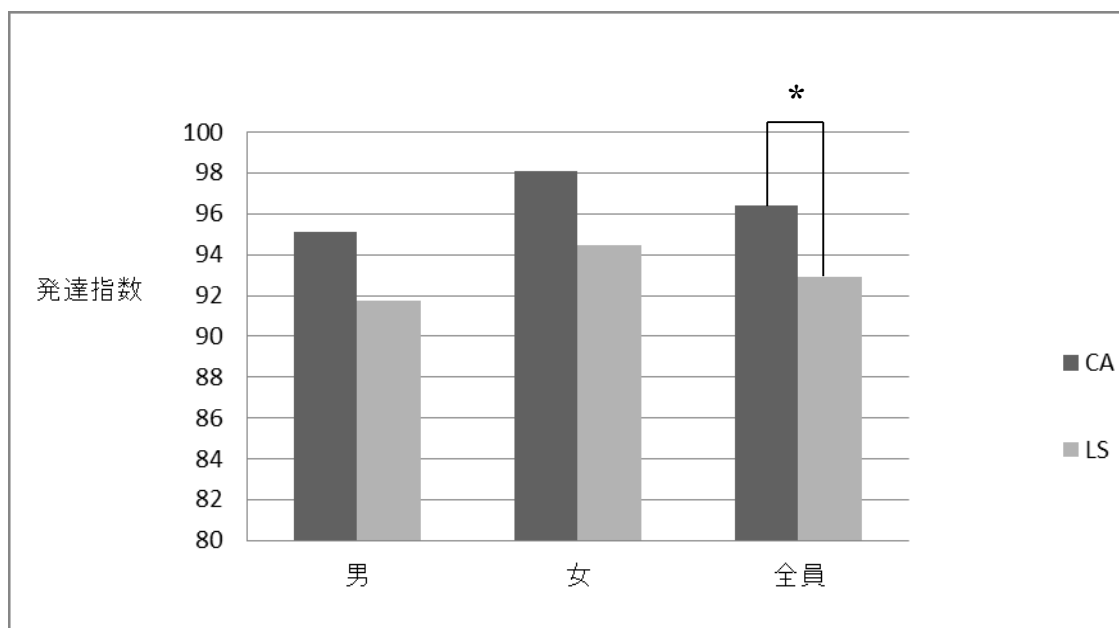
対象児全体の発達指数は 95.0 ± 12.5 (平均値 $\pm$ 標準偏差), 認知・適応領域は 96.7 ± 14.2 , 言語社会領域は 93.2 ± 14.1 はであった。

男女別にみると, 男児の発達指数は 94.1 ± 11.7 , 認知・適応領域は 95.6 ± 14.8 , 言語・社会領域は 92.3 ± 11.5 であり, 女児の発達指数は 96.3 ± 13.6 , 認知・適応領域は 98.1 ± 13.3 , 言語・社会領域は 94.5 ± 17.1 であった。

全領域, 認知・適応領域 (C-A), 言語・社会領域発達指数 (L-S) において, 男女間に有意な差はなかった。一方で, 認知・適応領域と言語・社会領域を比べると, 男児, 女児, 全体のいずれでも言語・社会領域に比べ認知・適応領域の値が高かった。男児, 女児では有意な差は見られなかったが, 男女全員では言語・社会領域に比べ認知・適応領域の値が高く, 有意な差 ($p < .05$) がみられた。(Fig3)

Table 5 新版 K 式発達検査 2001 男女，領域別の発達指数（平均値±標準偏差）

	認知・適応領域	言語・社会領域	全領域
男	95.6±14.8	92.3±11.5	94.1±11.7
女	98.1±13.3	94.5±17.1	96.3±13.6
全員	96.7±14.2	93.2±14.1	95.0±12.5



*p<.05, **p<.01

Figure 3. 認知・適応領域（C-A）と言語・社会領域（L-S）の発達指数（平均値±標準偏差）

2. 新版 S-M 社会生活能力検査

新版 K 式発達検査 2001 実施時の対象児の年齢（月齢）は 2 歳児クラスの男児は 42.2 ± 4.0 か月（平均値 $\pm$ 標準偏差）、女児は 37.3 ± 3.7 か月、全体では 40.8 ± 3.9 か月であった。3 歳児クラスの男児は 52.6 ± 4.3 か月、女児は 51.5 ± 3.3 か月、全体では 52.2 ± 4.0 か月であった。4 歳児クラスの男児で 64.8 ± 3.3 か月、女児は 65.5 ± 2.4 、全体では 65.1 ± 2.9 か月であった。5 歳児クラスの男児は 76.2 ± 2.8 か月、女児は 76.5 ± 2.8 か月、全体では 76.3 ± 2.8 であった。（Table6）

Table 6 新版 S-M 社会生活能力検査実施時の対象児の年齢（月齢）

（平均値 $\pm$ 標準偏差）

	男	女	全体
2 歳児	42.2 ± 4.0	37.3 ± 3.7	40.8 ± 3.9
3 歳児	52.6 ± 4.3	51.5 ± 3.3	52.2 ± 4.0
4 歳児	64.8 ± 3.3	65.5 ± 2.4	65.1 ± 2.9
5 歳児	76.2 ± 2.8	76.5 ± 2.8	76.3 ± 2.8

新版 S-M 社会生活能力検査の社会生活指数（SQ）ごとの人数を Table5 に示した。社会生活指数が 50～59 だったのは 1 人（男児 1 人女児 0 人）で全体の 0.11%，60～69 だったのは 2 人（男児 1 人女児 1 人）で 0.22%，70～79 だったのは 12 人（男児 8 人女児 4 人）で 13.3%，80～89 だったのは 22 人（男児 18 人女児 4 人）24.4%，90～99 だったのは 20 人（男児 13 人女児 7 人）で 22.2%，100～109 だったのは 22 人（男児 9 人女児 13 人）で 24.4%，110～119 だったのは 7 人（男児 1 人女児 6 人）で 7.78%，120～129 だったのは 3 人（男児 0 人女児 3 人）で 3.3%，130～139 だったのは 1 人（男児 0 人女児 1 人）で 1.1%であった。（Fig4）

Table 7 年齢・性別ごとの社会生活指数の人数

	2 歳		3 歳		4 歳		5 歳		全体
	男	女	男	女	男	女	男	女	
50～59	0	0	0	0	1	0	0	0	1
60～69	0	0	0	0	0	1	1	0	2
70～79	1	0	2	2	2	1	3	1	12
80～89	2	0	9	2	2	0	5	2	22
90～99	4	3	2	2	2	1	5	1	20
100～109	2	5	1	1	5	3	1	4	22
110～119	0	3	0	1	1	2	0	0	7
120～129	0	1	0	0	0	2	0	0	3
130～139	0	1	0	0	0	0	0	0	1

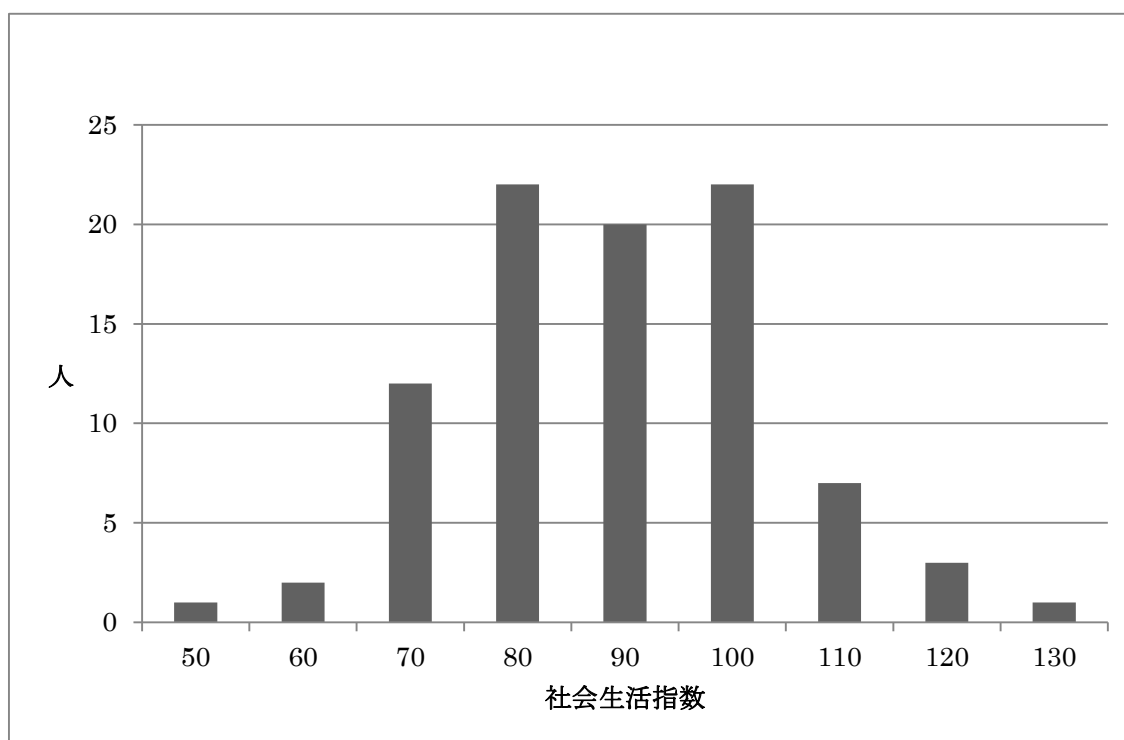


Figure 4 S-M 社会生活能力検査 社会生活指数の分布

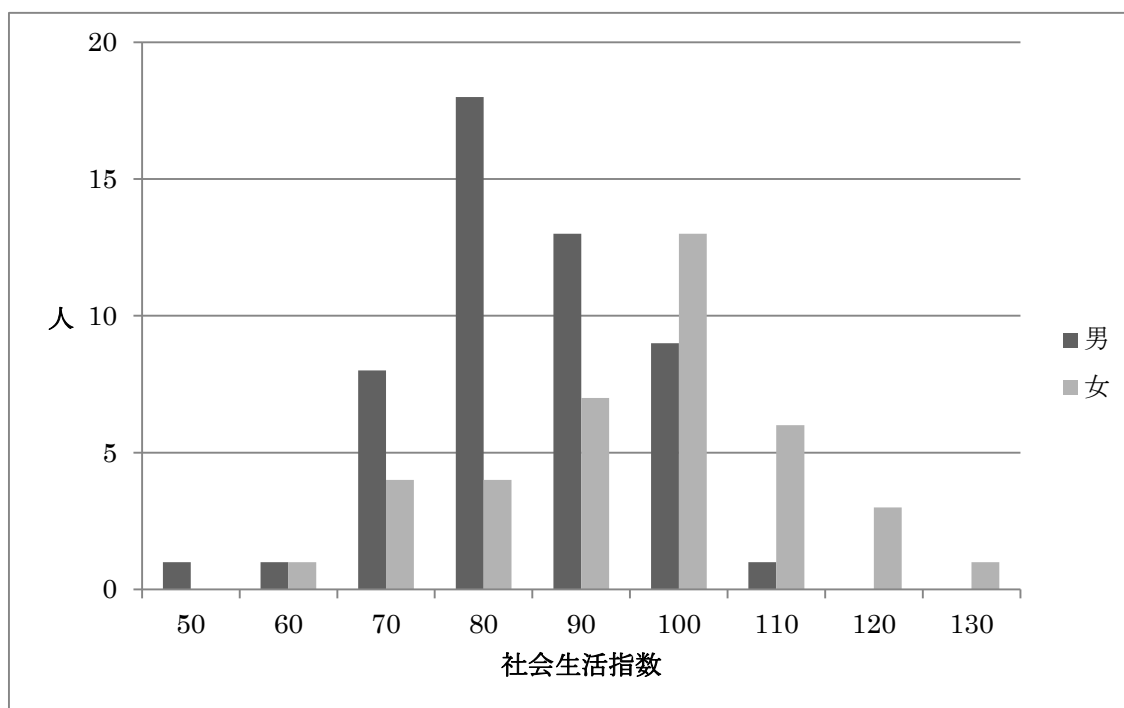


Figure 5 新版 S・M 社会生活能力検査の社会生活指数 (SQ) の男女別分布

新版 S・M 社会生活能力検査の社会生活指数の得点を男女別, 構成領域別に Table8 に示した。

対象児全体の社会生活指数は 93.5 ± 15.4 (平均 $\pm$ 標準偏差), 身辺自立は 98.9 ± 19.3 , 移動は 89.3 ± 16.7 , 作業は 87.9 ± 15.3 , 意志交換は 90.5 ± 17.5 , 集団参加は 99.9 ± 21.4 , 自己統制は 97.3 ± 21.1 であった。

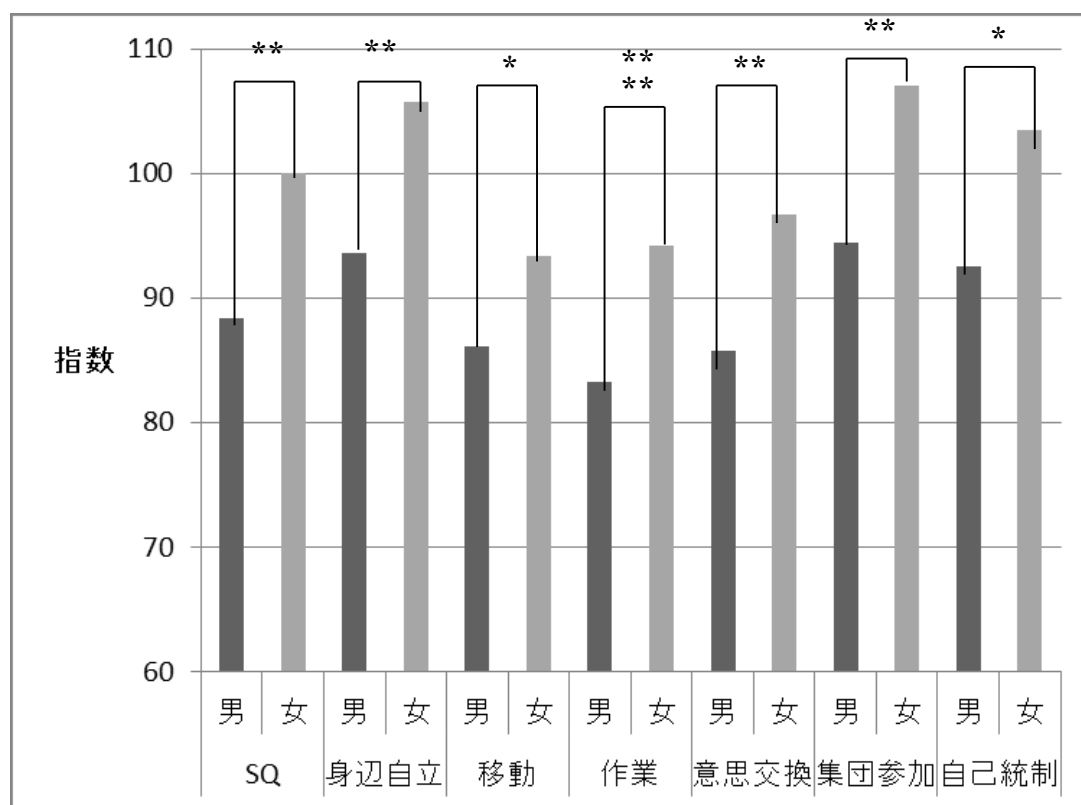
男女別にみると男児の社会生活指数は 88.4 ± 11.7 , 身辺自立は 97.0 ± 20.4 , 移動は 90.9 ± 15.3 , 作業は 85.1 ± 14.8 , 意志交換は 85.1 ± 18.5 , 集団参加は 93.7 ± 19.7 , 自己統制は, 92.0 ± 18.0 であった。女児の社会生活指数は 100.1 ± 16.0 , 身辺自立は 105.9 ± 19.1 , 移動は 97.3 ± 16.7 , 作業は 94.8 ± 16.1 , 意志交換は 95.6 ± 18.7 , 集団参加は 101.0 ± 21.2 , 自己統制は 100.1 ± 22.7 であった。

社会生活指数 (SQ) を男女間で比較したところ, どの年齢においても女児の方が男児よりも高く, 女児の SQ の平均値は男児に比べると有意に高かった ($p < .01$)。また, 6 領域で男女差を検討した結果, すべての領域において, 男女間に有意な差

がみられた (Fig6)。

Table 8.男女別の社会生活指数と 6 領域の生活指数 (平均値±標準偏差)

	社会生活指数 (SQ)	身辺自立	移動	作業	意思交換	集団参加	自己統制
男	88.4±11.7	97.0±20.4	90.9±15.3	85.1±14.8	85.1±18.5	93.7±19.7	92.0±18.0
女	100.1±16.0	105.9±19.1	97.3±16.7	94.8±16.1	95.6±18.7	101.0±21.2	100.1±22.7
全員	93.5±15.4	98.9±19.3	89.3±16.7	87.9±15.3	90.5±17.5	99.9±21.4	97.3±21.1



*p<.05, **p<.01

Figure 6.領域別の社会生活指数 (SQ) と各領域の生活指数 (平均値±標準偏差)

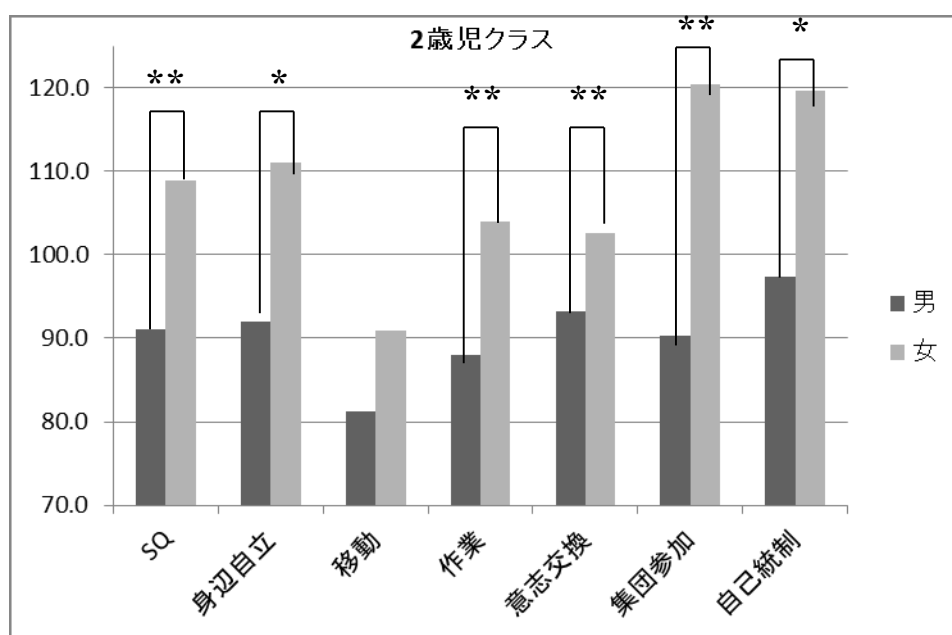
Table 9. 学年別、男女別の 6 領域の生活指数 （平均値±標準偏差）

		身辺自立	移動	作業	意志交換	集団参加	自己統制
2 歳	男	92.0±13.7	81.3±15.2	88.0±8.1	93.3±8.0	90.4±21.0	97.4±4.0
	女	111.1±18.2	90.9±15.8	104.0±9.3	102.6±16.1	120.4±21.5	119.6±17.4
3 歳	男	86.6±12.5	78.2±15.5	74.8±8.9	79.8±6.6	98.4±20.7	90.1±19.5
	女	99.1±19.0	90.6±18.7	77.4±16.2	86.5±20.0	98.8±9.1	85.4±16.9
4 歳	男	108.7±22.2	91.5±17.8	88.4±17.2	90.0±20.7	94.0±25.5	91.2±24.6
	女	111.7±23.5	97.8±21.9	100.2±14.5	99.1±24.3	104.2±26.1	99.3±27.7
5 歳	男	87.9±12.7	91.7±12.8	83.7±11.3	83.0±16.1	93.6±13.9	93.1±10.1
	女	96.5±9.7	94.9±8.0	87.4±11.1	94.1±9.5	97.2±12.7	100.5±10.9

学年別の 6 領域の得点を Table9 に示した。にみると、2 歳児クラスの男児の身辺自立は 92.0±13.7, 移動は 81.3±15.2, 作業は 88.0±8.1, 意思交換は 93.3±8.0, 集団参加は 90.4±21.0, 自己統制は 97.4±4.0 であった。2 歳児クラス女児の身辺自立は 111.1±18.2, 移動は 90.9±15.8, 作業は 104.0±9.3, 意志交換は 102.6±16.1, 集団参加は 120.4±21.5, 自己統制は 119.6±17.4 であった。3 歳児クラス男児の身辺自立は 86.6±12.5, 移動は 78.2±15.5, 作業は 74.8±8.9, 意志交換は 79.8±6.6, 集団参加は 98.4±20.7, 自己統制は 90.1±19.5 であった。3 歳児クラス女児の身辺自立は 99.1±19.0, 移動は 90.6±18.7, 作業は 77.4±16.2, 意志交換は 86.5±20.0, 集団参加は 98.8±9.1, 自己統制は 85.4±16.9 であった。4 歳児クラス男児の身辺自立は 108.7±22.2, 移動は 91.5±17.8, 作業は 88.4±17.2, 意志交換は 90.0±20.7, 集団参加は 94.0±25.5, 自己統制は 91.2±24.6 であった。4 歳児クラス女児の身辺自立は 111.7±23.5, 移動は 97.8±21.9, 作業は 100.2±14.5, 意志交換は 99.1±24.3, 集団参加は 104.2±26.1, 自己統制は 99.3±27.7 であった。5 歳児クラス男児の身辺自立は 87.9±12.7, 移動は 91.7±12.8, 作業は 83.7±11.3, 意志交換は 83.0±16.1, 集団参加は 93.6±13.9, 自己統制は 93.1±10.1 であった。5 歳児クラス女児の身辺自立は 96.5±9.7, 移動は 94.9±8.0, 作業は 87.4±11.1, 意志交換は 94.1±9.5, 集団参加は 97.2±12.7, 自己統制は 100.5±10.9 であった。

すべての学年のすべての領域で男児より女児の方が得点が高かった。

2 歳児クラスの社会生活指数 (SQ)、身辺自立、作業、集団参加、自己統制、5 歳児クラスの意志交換で男女間に有意な差がみられ、2 歳児クラスの意志交換と 5 歳児クラスの身辺自立で男女間に有意傾向がみられた。3 歳児クラス、4 歳児クラスでは有意差がみられた領域はなかった。(Fig7～10)



*:p<.05, **:p<.01

Figure 7.2 2歳児クラスの新版 S-M 社会生活能力検査の男女別得点

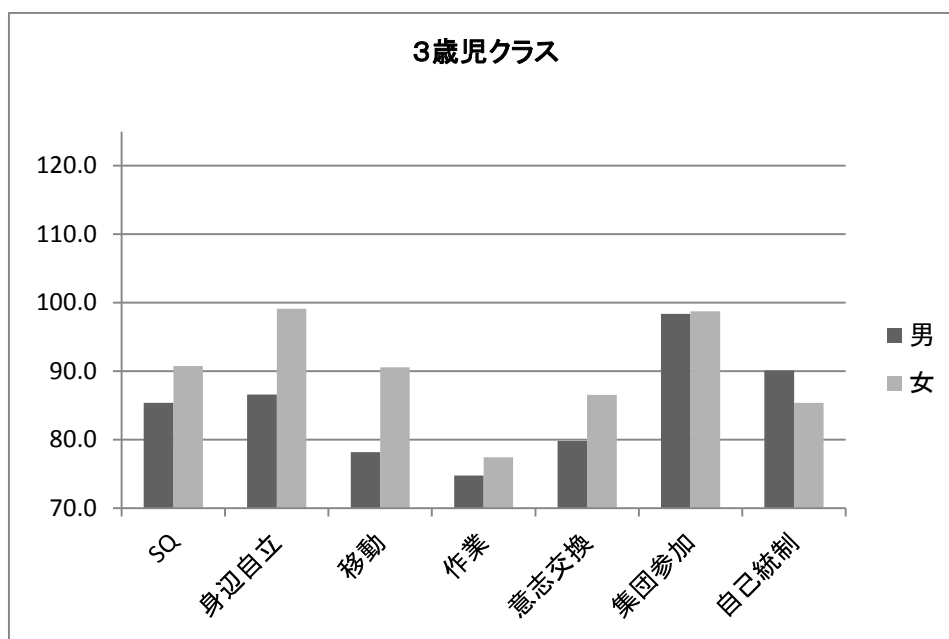


Figure 8.3 3歳児クラスの新版 S-M 社会生活能力検査の男女別得点

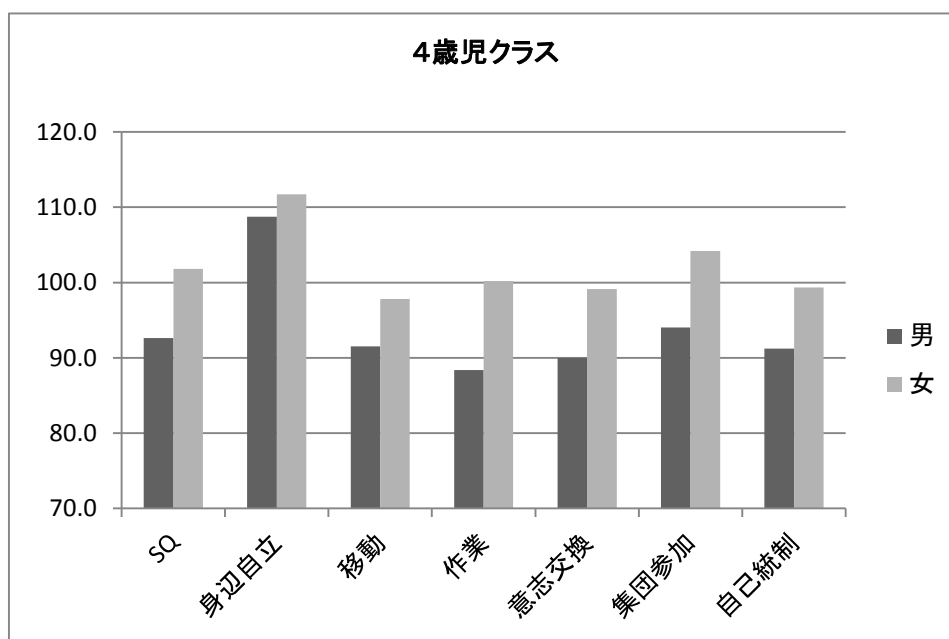
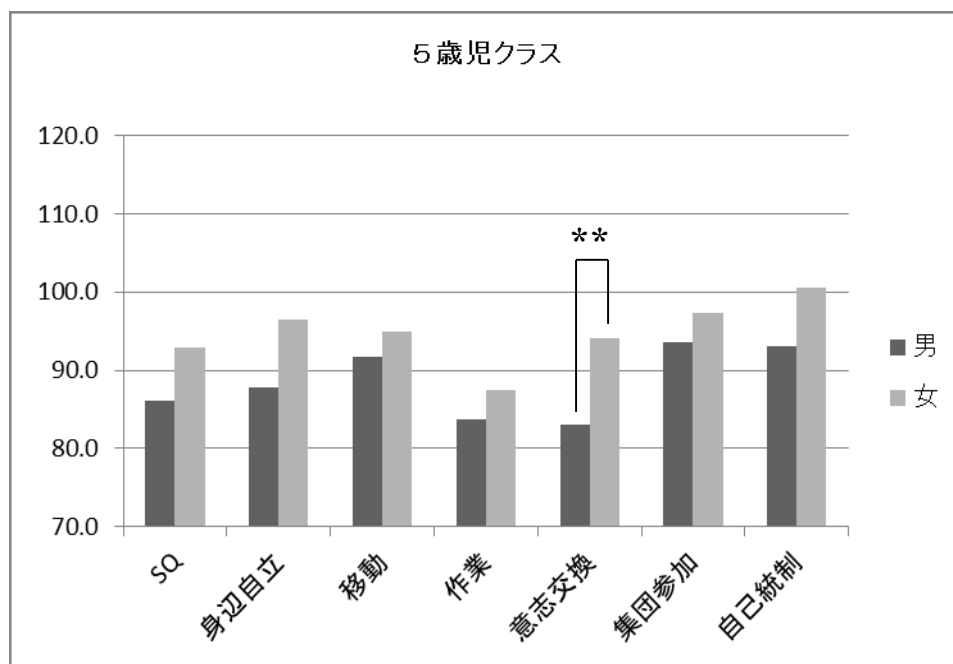


Figure 9. 4 4歳児クラスの新版 S-M 社会生活能力検査の男女別得点



*:p<.05, **:p<.01

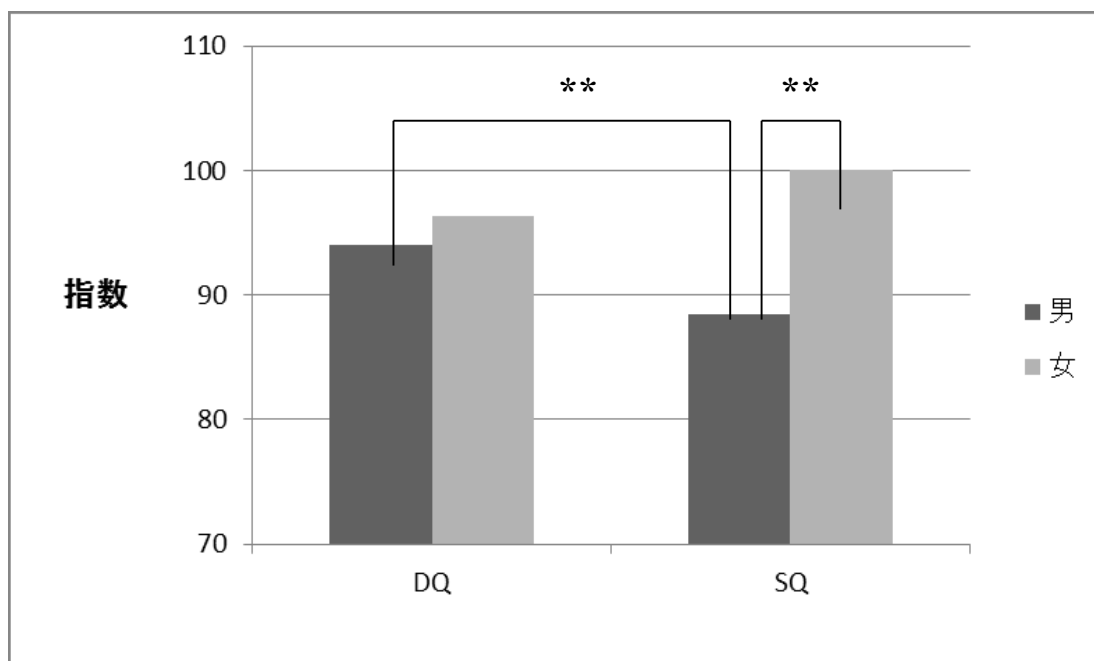
Figure 10. 5歳児クラスの新版 S-M 社会生活能力検査の男女別得点

3. 新版 K 式発達検査 2001 と新版 S-M 社会生活能力検査の関連

新版 K 式発達検査 2001 と新版 S-M 社会生活能力検査の関連を分析した。新版 K 式発達検査 2001 の全領域発達指数 (DQ) と新版 S-M 社会生活能力検査の社会生活指数 (SQ) の男女別の平均値を Table10 に示した。発達指数と社会生活指数は、男児は発達指数の方が高く、女児は社会生活指数の方が有意に高い。また、男児のみ発達指数と社会生活指数の間に有意な差 ($p<.01$) がみられた (Fig11)。

Table 10 男女別の発達指数と生活能力指数（平均値±標準偏差）

	発達指数	社会生活指数
男	94.1±11.7	88.4±11.7
女	96.3±13.6	100.1±16.0
全員	95.0±12.5	93.5±15.4



**p<.01

Figure 11.男女別の全領域発達指数（DQ）と社会生活指数（SQ）

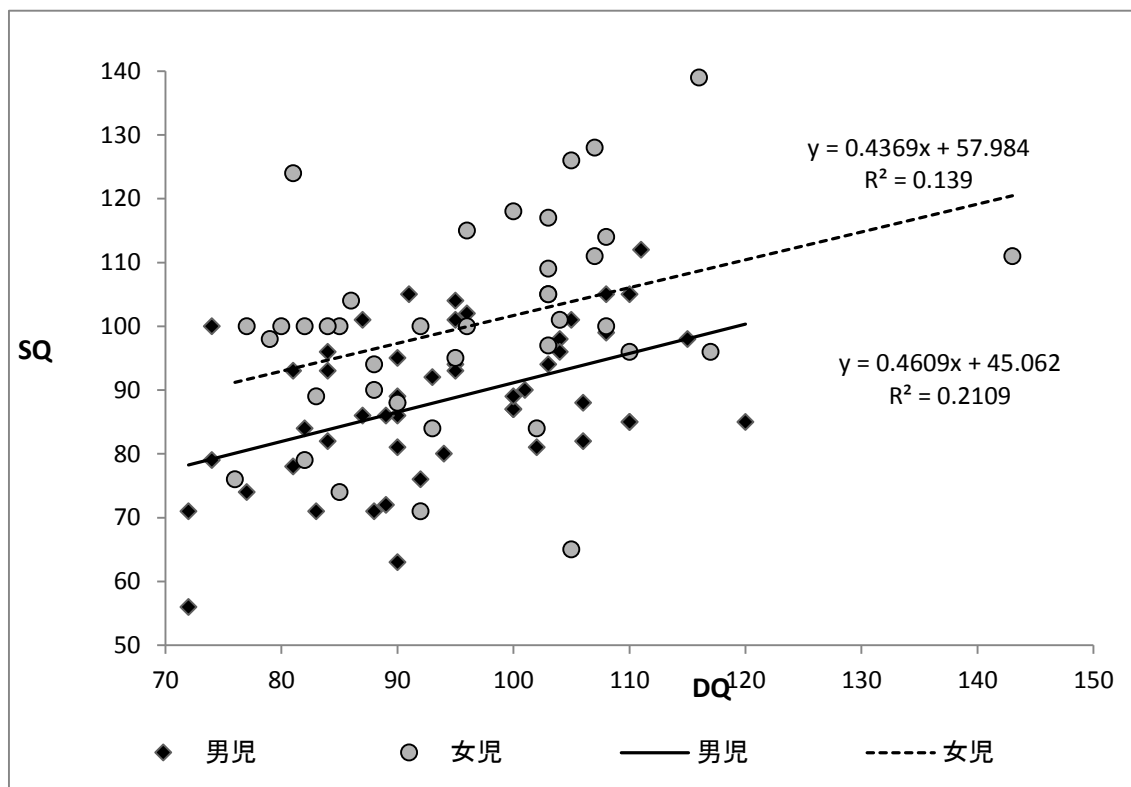


Figure 12. SQ と DQ の得点の分布

新版 K 式発達検査 2001 の発達指数 (DQ) と新版 S-M 社会生活能力検査の社会生活指数 (SQ) の相関を求めると、全体では中程度の相関 ($r=0.411$, $p<0.05$) があり、男児では中程度の相関 ($r=0.46$, $p<0.05$), 女児ではある程度の相関 ($r=0.37$, $p<0.05$) であった。(Fig12)

4. 行動観察

発達指数（DQ）と社会生活指数（SQ）に 15 以上差があり，発達指数より社会生活指数が低いのは，3 歳男児 6 名・女児 4 名，4 歳男児 3 名・女児 1 名，5 歳男児 3 名の計 17 名であった（Table11）。社会生活指数が発達指数よりも低い幼児は男児に多く，社会生活指数が発達指数よりも高い幼児は女児に多かった。

Table 11 .DQ と SQ に差があった幼児の数

	DQ>SQ	DQ<SQ
男	12	1
女	5	12
合計	17	13

発達指数（DQ）と社会生活指数（SQ）に大きな差があった幼児についての得点（Table12）と行動特徴をあげた。

Table 12 発達指数（DQ）と社会生活指数（SQ）に大きな差があった幼児の得点

	学 年	男 女	新版 K 式発達検査 2001					新版 S・M 社会生活能力検査							
			P・M	C・A	L・S	DQ	実 施 月 齢	SQ	身 辺 自 立	移 動	作 業	意 思 交 換	集 団 参 加	自 己 統 制	実 施 月 齢
A	3	男	—	88	112	102	48	81	75	73	81	83	65	106	48
B	3	男	—	106	114	110	48	85	102	59	66	76	97	86	59
C	3	男	—	88	79	83	48	71	88	69	65	78	61	39	51
D	3	女	—	69	96	80	48	100	115	108	88	77	110	98	52
E	4	女	—	105	105	105	60	65	67	56	84	63	59	52	63
F	5	男	—	100	82	90	72	63	66	62	63	47	68	70	73
G	5	男	—	67	75	72	60	56	76	66	57	59	26	38	68

① A 児（3 歳児クラス・男児）

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域（C-A）＝88，言語・社会領域（L-S）＝112，発達指数（DQ）＝102

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数（SQ）＝81，身辺自立＝75 移動＝73，作業＝81，意思交換＝83，
集団参加＝65，自己統制＝106

・行動観察

集団での一斉指示は理解できず，個別の声かけ必要である。カードゲームなどはルールが分からず，自分の好きなルールに変えようとする。三輪車などで一人

で遊んでいることが多い。自分の行動に自信がない。自分のクラスの名前やグループ名などもわかっていないことがある。

② B 児（3 歳児クラス・男児）

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域（C・A）＝106，言語・社会領域（L・S）＝114，発達指数（DQ）＝110

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数（SQ）＝85，身辺自立＝102，移動＝59，作業＝66，意思交換＝76，集団参加＝97，自己統制＝86

・行動観察

戦いごっこをして遊ぶとき、力の加減が分からずやりすぎてしまう。他児に対しては強い力で向かっていくが、他児の手などが B 児にあたるとすぐに泣く。集団での遊びに参加できている。一斉指示では理解できないことが多いが、友達が B 児に教えてくれ集団から外れることは少ない。

③ C 児

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域（C・A）＝88，言語・社会領域（L・S）＝79，発達指数（DQ）＝83

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数（SQ）＝71，身辺自立＝88，移動＝69，作業＝65，意思交換＝78，集団参加＝61，自己統制＝39

・行動観察

いつもはできることがその時の気分によってできない。言われたことをするのが苦手である。ルールのある遊びではルールを理解したり，ルールを守ったりして遊ぶことができない。制作遊びでは先生と一緒にしようと誘われるが「できひん」とやろうとしないことが多い。外遊びは他児と遊ぶことは少なく，ひとりでうろうろしていることが多い。

④ D 児（3 歳児クラス・女兒）

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域（C-A）＝69，言語・社会領域（L-S）＝96，発達指数（DQ）＝80

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数（SQ）＝100，身辺自立＝115，移動＝108，作業＝88，意思交換＝77，集団参加＝110，自己統制＝98

・行動観察

わからないことがあった時や困ったときに聞かずに笑って済ませることがある。
できないことや間違ったり嫌なことがあると固まったまま動けなことがある。
集団では困ることはほとんどなく，友達とも仲良く遊べている。

⑤ E 児（4 歳児クラス・女兒）

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域（C-A）＝105，言語・社会領域（L-S）＝105，発達指数（DQ）＝105

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数（SQ）＝65，身辺自立＝67，移動＝56，作業＝84，意思交換＝63，
集団参加＝59，自己統制＝52

・行動観察

他児と興味が異なり，他児との遊びの共有を嫌がることが多い。遊びに誘われると，少しだけ参加しすぐにやめたり，「いいわ。」と断わったりする。E 児の遊びに他児が参加しようとするとう遊びをやめてしまう。ごっこ遊びなどでは遊びの設定を他児と共有できない。日常生活の決められた活動も他児と同じペースでは動けず，強く指示されると，泣き叫ぶことがある。日によって気分の浮き沈み激しい。一度気分が崩れるとなかなか気持ちが切り替えられずその状態が半日続くこともある。

⑥ F 児（5 歳児クラス・男児）

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域 (C-A) = 100, 言語・社会領域 (L-S) = 82, 発達指数 (DQ) = 90

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数 (SQ) = 63, 身辺自立 = 66, 移動 = 62, 作業 = 63, 意思交換 = 47, 集団参加 = 68, 自己統制 = 70

・行動観察

一斉指示が、理解できないため、個別の声かけが必要である。話し合い活動に参加できない。ルールのある遊びを理解することが難しい。仲の良い友達がいない。自由に遊ぶ時間にはひとりで遊んでいることが多い。集団での遊びは参加するが、全体の流れや周囲の状況をわかっていないことが多い。手先の不器用さがあり、製作活動は苦手。歌を覚えられず、歌えない。

⑦ G 児 (5 歳児クラス・男児)

・新版 K 式発達検査 2001 の結果

認知・適応領域 (C-A) = 67, 言語・社会領域 (L-S) = 75, 発達指数 (DQ) = 72

・新版 S・M 社会生活能力検査の結果

社会生活指数 (SQ) = 56, 身辺自立 = 76, 移動 = 66, 作業 = 57, 意思交換 = 59, 集団参加 = 26, 自己統制 = 38

・行動観察

リレーなど勝ち負けがある遊びの時に負けた友達に対して指摘する。弟にできないことをよく指摘されていることも影響していると思われる。初めてのことは苦手であるが、何度も繰り返し行うことでできるようになる。以前は体操服や劇の衣装が一人で着れないことなどがあったが、最近はできるようになってきた。3 歳児クラスの友達をおどかしたりして遊ぶなど、年齢の低い友達に関わっていきこうとすることが多い。

IV. 考察

新版 K 式発達検査 2001 の結果、男女全員で認知・適応領域と言語・社会領域の発達指数に有意な差がみられた。新版 K 式発達検査 2001 の認知・適応領域は形や図形の理解、描画などの平面的・空間的な取扱い、時系列的な理解力が試される（中瀬ら 2001）一方で、言語・社会領域は、言語発達やコミュニケーションの力をみる領域である。今回の結果では、認知・適応領域に比べ、言語・社会領域の得点がありに低く、ことばやコミュニケーションに弱さがあることがうかがえる。

新版 K 式発達検査 2001 と新版 S-M 社会生活能力検査の関連を分析した結果、新版 K 式発達検査 2001 では、どの領域にも男女間に有意な差は見られなかったが、新版 S-M 社会生活能力検査では社会生活指数やすべての構成領域において男女間に有意差がみられた。また、男児においては、発達指数が社会生活指数に比べて有意に高い得点であった。これは、男児と女児の間に大きな知的発達の差はないが、男児の方が女児よりも社会生活能力の発達が遅く、生活に困難をきたしやすいことが考えられる。

ことばやコミュニケーションの力が弱い、知的発達には問題がないが生活面に問題があるなどという特徴は、近年増加しているといわれる（斉藤ら 2008）「気になる子」の特徴と重なる。本郷ら（2005）は、気になる子どもとは、顕著な知的な遅れがないにもかかわらず「子ども同士のトラブルが多い」「自分の感情をうまくコントロールできない」「多動である」などの行動特徴をもつ子どもであるとしている。保育園や幼稚園には、知的発達には遅れはないが、コミュニケーションが取れない・こだわりが強い・トラブルが多い・話が聞けない・多動であるなど、社会性や行動の発達に未熟性を持ち、保育園や幼稚園での社会生活に困難をきたしている子どもが多数存在している。その子どもたちは発達障害に似た特徴を持っており、「気になる子ども」といわれる（郷間 2008）。このような「気になる子ども」の中には、後に LD や ADHD、広汎性発達障害などと判定される子どもも含まれるが、そのすべての「気になる子ども」が発達障害と判定されるわけではない（本郷ら 2007）。

郷間ら（2007）によると、京都市にある 16 か所の保育園を調査した結果、「気になる子ども」は男児 21.04%、女児 5.58%、全体では 13.43%に認められたとしており、女児よりも男児に多い。また、谷ら（2011）、大西ら（2010）は、保育記録に

よる発達尺度を用いて年少から年長 1, 158 名の生まれ月や性別による発達の差異を検討した結果、生活領域、言語領域、運動領域、活動領域、対人領域、情緒領域の 6 領域すべてで女児の方が男児よりも有意に得点が高いという結果を得たと報告している。

今回の結果においても、新版 S-M 社会生活能力検査のすべての領域で女児が男児よりも有意に得点が高く、子どもの発達には性差があると考えられる。

池田ら（2007）の保育士を対象にした質問紙調査の結果、「気になる子ども」の特徴の最も多かったものは、ことば・コミュニケーションに関する課題であった。今回の調査の結果、男女とも、ことばやコミュニケーションの弱さがみられたことから、子ども全体が言語発達やコミュニケーションの力が弱くなってきていることが考えられる。また、久保山ら（2009）が保育士にアンケートを行った結果、「気になる子ども」の保育上の課題として発達がアンバランスな子どもについてあげ、それらの子どもの中には、理解力はあるのにやろうとしない・知識やことばの発達と社会性などの精神的な発達のアンバランスな子どもがいると報告している。今回の調査においても、ことばやコミュニケーションに弱さがある、知的には問題がないが社会生活に困難をきたすなど、子どもの発達のアンバランスさがうかがえる結果となった。

今回みられた社会生活能力の遅れや男女差などの発達のアンバランスは、以前からみられていたものなのか、それとも、最近の子どもに見られるようになったものなのであろうか。池田ら（2007）の調査で保育士らは、気になる子どもが増えていと回答している。近年の子どもを取り巻く環境の変化が子どもの発達に大きく影響しているのではないかと考える。家庭内に電化製品やテレビが普及した 1970 年代より学校で子どもがあくびをする、じっと座っていることができない、などと言われ始め、その原因として、テレビを長時間見ることによって夜更かしや運動不足になり、それが睡眠不足や体の疲れにつながっていると指摘され、家庭での生活リズムの乱れが問題視された（中江 2010）。また、友田（2009）は、昨今の核家族化、ライフスタイルの多様化など、社会環境の変化は、乳幼児の健全な成長に大きな影響を及ぼしているとし、乳幼児の食生活・睡眠・遊び・メディアとの接触・人との関わり、夜型生活などにおける変化と多様性は乳幼児の生活リズムの乱れとして、さまざまな問題発生の要因となっていると指摘している。乳幼児が十分に睡眠をとれな

い場合、家庭や幼稚園・保育所などでの行動に影響を及ぼすため、睡眠覚醒リズムを正しく発達させることは、乳幼児の脳の発達には必須であると述べている。片岡（2010）は、肉声によるコミュニケーションと多世代交流の機会が失われ、対面会話を代わってケイタイやメールでのバーチャルなコミュニケーションが進み、コミュニケーション不全と言われる状況が現れていとしている。これらのことが、発達のアンバランスさやコミュニケーションの力が弱さに影響しているのではないかとと思われる。

また、近年、男女の脳機能や発達の性差があきらかになりつつあり（エリオット 2010）、このことに関しても今後の検討が待たれる。

このように、発達に影響を与えるさまざまな要因についてさまざまな議論が必要であると思われる。

参考文献

- 秋山千枝子ほか（2006）：津守・稲毛式による現代っ子の発達の特徴（第一報）1961年1989年と比較して．小児保健研究，65；331-337.
- 郷間英世（2011）：現代の子どもの発達の遅れとアンバランスさ．小児科；52：73 - 80.
- 郷間英世（2006）：現代の子どもの発達的特徴とその加齢に伴う変化—1983年および2001年のK式発達検査の標準化データによる検討Ⅱ—．小児保健研究，65，282 - 289.
- 郷間英世・郷間安美子・川越奈津子（2007）：保育園に在籍している診断のついている障害児および診断はついていないが保育上困難を有する「気になる子ども」についての調査研究．京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」，27，19 - 29.
- 郷間英世・木下佐枝美・川越奈津子・中市悠・木村秀生・郷間安美子（2010）：現代幼児の人物画描画発達と気になる子の描画 グッドイナフ人物画検査を用いた検討．京都教育大学紀要，117，63-71.
- 本郷一夫（2007）：保育の場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果．LD研究，16（3），254-264.
- 本郷一夫（2005）：「気になる」幼児とは．言語，34，42 - 49.
- 堀口寿広・秋山千枝子（2006）：津守・稲毛式による現代っ子の発達の特徴（第2報）発達経過による類型化．小児保健研究，65（2），338 - 343.
- 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子（2007）：保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題に関する調査研究．小児保健研究，66（6），815-820.
- 生澤雅夫・松下裕・中瀬惇（2002）：新版K式発達検査2001手引書．朝陽堂印刷株式会社．
- 片岡輝（2010）：主体的に子どもが文化を生み出せる環境整備．子ども白書2010，日本子どもを守る会．
- 川越奈津子，郷間英世，牛山道雄，池田知美，郷間安美子；現代の子どもの描画発達についての研究—保育園幼児のグッドイナフ人物画知能検査による検討—．小

- 児保健研究. 2011 ; 70 ; 2 : 257 - 261.
- 久保山茂樹・斎藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳（2009）：「気になる子ども」「気になる保護者」についての保護者の意識と対応に関する調査—幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言—, 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 36, 55 - 76.
- 三木安正（1980）：新版 S - M 社会生活能力検査手引き. 日本文化科学社.
- 中江和恵（2010）：子どもが健やかに育つ家庭づくり. 子ども白書 2010, 日本子どもを守る会.
- 中瀬惇・西尾博（2001）：新版 K 式発達検査反応事例集. ナカニシヤ出版.
- 大西将史・中島俊思・松岡弥玲・谷伊織・永田雅子・吉橋由香・神谷美里・野村香代・岡田涼・辻井正次（2011）：保育記録による発達尺度の標準得点（2）—活動領域, 対人領域および情緒領域の検討—小児の精神と神経. 51 (3), 247-259.
- リーズ・エリオット（2010）：女の子の脳 男の子の脳 神経科学から見る子どもの育て方. NHK 出版
- 斎藤愛子・中津郁子・栗飯原良造（2008）：保育所における「気になる」子どもの保護者支援. 小児保健研究, 67 (6), 861 - 866.
- 新版 K 式発達検査研究会（2008）：新版 K 式発達検査法 2001 年版標準化資料と実施法. ナカニシヤ出版.
- 谷伊織・大西将史・中島俊思・松岡弥玲・永田雅子・吉橋由香・神谷美里・野村香代・岡田涼・辻井正次（2011）：保育記録による発達尺度の標準得点（1）—生活領域, 言語領域および運動領域の検討—小児の精神と神経. 51 (3), 231-245.
- 友田明美（2009）；乳幼児の睡眠異常. 小児科, 50 (8) , 1319 - 1324.
- 中央教育審議会（2007）；子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—（答申）.

資料

謝辞

本研究を進めるにあたり，丁寧かつ熱心にご指導くださいました指導教官の郷間英世先生に深く感謝いたします。そして，ご指導・ご助言いただきました発達障害学科の先生方にも深く感謝いたします。

また，調査を快く引き受けてくださいました，園長先生，ゆり先生をはじめ，お忙しい中ご協力くださった保育園の先生方にも厚くお礼申し上げます。

調査の実施には，大谷さん，鈴木さんが協力してくださり，助けていただきました。本当にありがとうございました。

そして，大学院に進むことを快く応援してくれいつも支えてくれている夫，さまざまな面でサポートしてくれていた両親，姉にも大変感謝しています。

研究を進めてこられたこと，多くのことを学べた貴重な３年間となったのは，多くの方に支えられているのだと感じています。ありがとうございました。

平成 25 年 1 月